様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １３ 日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０４２９４

研究課題名（和文）「文字とのかかわり」に着目した幼児期の教育と小学校教育の接続期カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of curriculum for transitional period between early childhood education and elementary school education focusing on letters

研究代表者
横山　真貴子（YOKOYAMA, MAKIKO）

奈良教育大学・学校教育講座・教授

研究者番号：６０３４６３０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児期の教育と小学校教育における大きな段差の１つに「言葉」があると考え、「話し言葉」中心の幼児教育と「書き言葉」中心の小学校教育を滑らかにつなぐ接続期カリキュラムを、「書き言葉」すなわち「文字」とのかかわりに着目して作成した。言葉の習得の基盤には、伝えたくなる人がいて、伝えたくなる経験があることを踏まえ、クラス集団の協同性を育みながら、「文字と出会う」「文字を使おうとする」「文字を使う」「文字を学ぶ」「文字で学ぶ」の５つのプロセスからなるカリキュラムを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年の世界的な課題でもある幼児期の教育と小学校教育の接続において、それぞれの教育現場の具体的な子どもの姿をもとに作成した本カリキュラムは、利用可能性が高く、教育的意義も大きい。
本カリキュラムでは、文字学習の観点だけではなく、文字の機能に立ち返り、人と人とをつなぐ文字のはたらきを明確にし、その習得を支える子どもの協同性の育ちを基盤とした。本カリキュラムの活用によって、幼児期と小学校教育との子どもの経験と学びをつなぎながら、人とのかかわりを深める文字教育の展開が期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a curriculum for transitional period between "spoken language"-centered early childhood education and "written language"-centered elementary school education focusing on letters. Building a relationship of mutual trust is important for the foundation of language acquisition. Therefore, I created a curriculum based on fostering the co-operation of the class group. The curriculum consists of five processes: "encounter with letters," "try to use letters," "use letters," "learn letters," and "learn with letters." It is expected that a smooth transition will be achieved with acquisitioning letters and increasing cooperativity.

研究分野：保育学・発達心理学

キーワード：幼小接続期　カリキュラム　文字

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年､就学前の保育･教育の質がその後の子どもの発達に大きく影響することが明らかにされ、その質の向上が世界的な課題となっている(例えば，OECD の保育白書『Starting Strong Ⅲ』(2012)など)。この結果を踏まえ、幼児期の教育と小学校教育の接続も議論され、５歳児保育・教育の義務化・無償化が各国で進められている。わが国においても、2008 年の「幼稚園教育要領」改訂・「保育所保育指針」改定以降、保幼小連携・接続を重視する動きが強まっている。

保幼小の滑らかな接続が求められる背景には、「小 1 プロブレム」など、両者の段差を子どもたちが乗り越えられずにいる現状もある。岡本(1985)は、段差の１つに話し言葉を中心とした幼児期の言葉(１次的ことば)と書き言葉を中心とした小学校以降の言葉(２次的ことば)を挙げ、２つの言葉をいかにつなぐかが幼児期と小学校の教育を滑らかに接続し、子どもの育ちの連続性を保障するために重要であると主張した。すなわち､「書き言葉(文字)」を幼児期の教育の中にいかに組み込んでいくかが、幼小接続の１つの要になるといえる。

幼児期の文字教育に関しては、1970 年代初頭から早期教育の問題とも絡み、長く議論されてきた。しかし「幼稚園教育要領」に文字の取扱いが明記されたのは、1998 年の改訂であった。領域「言葉」に「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」ことを目指し、「幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝えることの喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること」と記された。一方、保育現場での文字指導は様々であり(巣立･和田,2014)、ドリルを用いた詰め込み教育を行う園もある(三神,2003)。

子どもの文字の習得について先行研究では、生活の中で文字に関連した活動を目にし、参加することによって自然と習得すること(内田,1999)、詰め込み型の文字教育が小学校での国語の学力には結びつかないこと(三神,2003)が明らかにされている。また幼児教育の基本が「環境を通しての教育」であることを考えれば、幼児教育における文字教育は、いかに文字環境を構成し「文字などで伝える楽しさ」や「文字に対する興味・関心」を育むかが重要となる。

２．研究の目的

本研究では、幼児期の教育と小学校教育における大きな段差の１つに「言葉」があると考え、「話し言葉」中心の幼児教育と「書き言葉」中心の小学校教育を滑らかにつなぐ接続期カリキュラムを、「書き言葉」すなわち「文字」とのかかわりに着目して開発することを目的とする。

具体的には、①文字環境、②文字とかかわる活動、③保育者・教師の援助について、(1)３歳児から小学校１年生まで、同一の対象の発達を追跡する縦断研究と、(2)国内外の国公私立の幼児教育施設の５歳児及び小学校１年生クラスの横断研究を実施する。(1)縦断研究により、丁寧に子どもの発達の過程を描き出しながら、(2)横断研究によって保育実践の多様性を把握しつつ、幼保一体化の新時代に対応する幼小接続カリキュラム(幼児期のアプローチカリキュラム、及び小学校入門期のスタートカリキュラム)の策定を目指す。

３．研究の方法

(1) 縦断研究

所属大学附属幼稚園３歳新入園児を対象に、小学１年生まで、保育・教育場面の観察，保育者・教師へのインタビュー等を実施し、①文字環境、②子どもと文字のかかわり、③保育者・教師の援助について検討した。幼稚園(アプローチカリキュラム)での観察は、通年を通して４，５月～翌３月まで週１回行った。2015 年度３歳児１クラス(24 名)26 回、2016 年度４歳児１クラス(27 名)計 30 回、2017 年度５歳児２クラス(54 名)計 20 回の観察を行い、園内、特に保育室内の「文字環境」を写真撮影するとともに、幼児が文字とかかわる行動を保育者の援助とともにビデオ録画した。併せて保育終了後、随時担任保育者にインタビューを行った。また３年間の縦断研究を実施する中で、「文字(書き言葉)」とのかかわり以前の「話し言葉」での伝え合いの重要性が指摘され、2018 年度は所属大学附属幼稚園５歳児２クラス(55 名)を対象に観察を実施した。

小学校(スタートカリキュラム)での観察は、2018 年度に通年の観察を予定していたが実施できなかったため、幼小交流活動の観察を行うとともに、３学期に１年生担任教師と幼稚園教諭との合同研究会を幼稚園でもち、幼小接続に関する意見交流を行った。

(2) 横断研究

接続期カリキュラムを策定している国内外の先進地域の５歳児及び小学校１年生等を視察し、カリキュラムの内容分析等を実施した。スタートカリキュラムに関しては、主に横浜市(市立池上小学校)､神戸大学附属学校園のものを中心に分析した｡アプローチカリキュラムについては、園による文字環境の相違や特徴について検討する目的と、「文字(書き言葉)」習得前の「話し言葉」の重要性に鑑み、N 市立こども園での観察を 2016 年度５歳児１クラス(29 名)34 回、2017 年度４歳児１クラス(28 名)33 回行った。

また 2018～2019 年度の２年間 A 市の「保幼こ小連携・接続事業」に講師としてかかわる中で得られた知見も研究対象とした。２つのブロックにおいて公私保育所・幼稚園・こども園、及び小学校を複数回観察し、保育者・教師の先生方との研究会・意見交流会を行った。特に 2019 年度には１年生の担任経験が豊富で幼児教育への理解が深いベテラン教師(教歴 29 年)が担任する１年生１クラス(28 名)を年間 7 回訪問し、授業などの観察、環境及び授業風景の写真撮影及びビデオ録画、当日の担任教師との振り返りとインタビュー(実践事例の提供も含む)、校長先生を交えての意見交流を行った。スタートカリキュラムは主にこの結果をもとに作成した。

なお、(1)(2)いずれの研究においても、研究趣旨を紙面と口頭で説明し承諾を得るとともに、個人情報保護に留意した。
(3) 接続期カリキュラムの作成
(1)(2)の結果を総合し、接続期カリキュラムを作成した。

４．研究成果
(1) 幼稚園における文字環境：所属大学附属幼稚園の３年間の縦断研究
①目的：スタートカリキュラムを作成するため、幼児教育における文字環境の学年ごとの特徴と変化を、同一対象を縦断的に追うことで明らかにする。
②分析方法：３～５歳児の保育室の文字環境を、以下の３点を分析の観点として比較検討した。(a)対象(文字が何を表しているのか)：「生活」「遊び」の２つに分類。(b)種類(何で表すか)：「絵」「記号(マーク)」「写真」「ひらがな」「カタカナ」「漢字」など。(c)機能(文字のはたらき)：「名称」(単語)か「情報」(文章)か。
③結果：３歳児では、文字環境として、「生活」「遊び」とも、子どもが園生活を送る上で必要なものの「名称」が厳選され、記号や絵・写真と共に文字(ひらがな)が提示されていた。具体的には「子どもの名前」が最も多く、次いで「ものの名称」、「生活を表すもの」が多かった。また「名称」が表示の中心であるため、保育室内に置かれるもの(おもちゃなど)が時期によって変われば、文字表記も変わった。学期が進むにつれ表示数が増え、「名前」だけではなく「情報」を提供する文章も表示されるようになった。ただし、全体として文字量は多くなかった。
４歳児では、４月当初は３歳児同様、「子どもの名前」や「ものの名称」を記号や絵とともに文字で表示する環境だったが、５月下旬から変化した。生き物の飼育が増えるにつれ、その生態や飼い方などの「情報」が絵や絵本のカラーコピー、写真などと共に文字(ひらがな)で書かれるようになった。２学期以降は、活動・遊びのふりかえりのドキュメンテーション、製作の手順、遠足の経路、歌詞など、絵や写真とともに文字(ひらがな)で表示されるものの種類や量が増えた。
５歳児になると、４月当初より「名前」や「名称」などは「ひらがなのみ」の表記となった。また「ほそいぺん」などのように「形容詞＋名詞」の表記も見られた。さらに「１日の生活の流れのボード」など「情報」を提示する文字の表記が多くなった。１学期半ばからは、行事などに向けてクラスでの話し合いが増えるにつれ、子どもの意見をホワイトボードに書き留めることも見られるようになった。新たに増える文字環境は、ほぼ「ひらがなのみ」であった。
④考察：文字は子どもの生活・遊び全般において用いられ、発達や生活に応じて文字環境も変化し、文字量も増加した。(a)内容については、同じ年齢であっても園生活や遊びの変化に応じて文字環境も再構成された。(b)種類は、「文字(ひらがな)」と「絵・記号(マーク)・写真」などの併記から「文字」のみへと移行した。(c)機能は、「名称」のみから「情報」の表示が増え、それに伴い「単語」から「文章」表記となった。また５歳児になると、環境として事前に書かれた文字が示されるだけではなく、「話し言葉」と共に目の前で書かれる、書き留める「文字」が提示された。子どもたちは「書いておけば忘れない」という「文字がとどまる」便利さを実感するとともに、文字を使って情報を整理し、思考の材料とする経験をしていた。

(2) 幼児期の子どもの文字とのかかわりと保育者の援助
：所属大学附属幼稚園の３年間の縦断研究
①目的：スタートカリキュラム作成のため、幼児期の子どもの文字とのかかわりと保育者の援助について、またその発達的変化を、同一対象を縦断的に追うことで明らかにする。
②分析方法：(a)子どもが自ら文字とかかわる場面と(b)保育者の設定場面に分け、事例を収集した。事例は「読む」「書く」の２つの観点から、子どもの行動と保育者の援助について分析した。
③結果：３歳児では、(a)子どもが自ら文字とかかわる場面でも(b)保育者の設定場面においても、全体的に「書く」ことよりも「読む」行動が多かった。絵本コーナーの絵本を手に取ってみる行動は、文字とのかかわりの中で最もよく見られる行動だった。また「読む」前の段階として、表示をじっと眺めるなど「文字などを見る」行動が多く見られた。「書く」行動は、(a)自発的なかかわりにおいて、絵などを描いた横に自分の名前の文字を書こうとする行動が大半であった。その場合も、文字のみを書く行動はほとんど見られなかった。(b)設定場面の中心は、保育者がクラス集団に絵本を読む場面であり、保育者が子どもに文字の読み書きを求めることはなかった。
４歳児になると、(a)自発的な「読む」行動では、室内の文字環境の増加と共に「掲示物」をじっと見つめ、文字を読む姿が増えた。絵本とのかかわりも、声を出して文字を読んだり、昆虫の生態や飼い方などについて、図鑑を見て調べる姿も見られるようになった。「書く」行動も個人差が大きいものの増加し、製作物に自分の名前を書く行動が増えた。また遊びの中で、お店屋さんごっこのメニューやチケットなど、文字や数字を書く姿も増え、「遊びの道具」として文字が使われるようになった。おうちごっこで段ボールや大型積み木で迷路をつくり、「いりぐち」などと紙に書いて貼ったりする姿も見られ、文字のみを書くことも増えた。さらに３学期になると、友達に思いを伝える手紙を文章で書く姿も観察された。(b)設定場面は、３歳児同様、保育者のクラス集団への絵本の読み聞かせ場面が中心であり、保育者が子どもに文字の読み書きを求めることはなかった。ただし子どもが尋ねれば、読み方や書き方を丁寧に教えていた。
５歳児になると、(a)自発的な「読む」行動では、登園すると「１日の生活の流れ」を見てその日の予定を確認するなど、「文字」のみから「情報」を得て行動する姿が見られるようになっ

た。絵本を読む行動も、絵本を見ながら折り紙を折るなど、情報を得る手段として絵本を見る行動が増えた。「掲示物」を見る頻度も増え、カレンダーを見ながら予定を声に出して読む、歌詞を見ながら歌うなどの姿が頻繁に見られた。「･･･のために見る」や「見ながら…する」といった目的的行動が多くなった。また５歳児では、個人差はあるものの「書く」活動が顕著に増えた。年下の子どもたちを遊びに誘う招待状やポスターなど、遊びを発展させるために文字を書く活動が広がった。友達が書いた文字を読むことも多くなり、「これ、なんて書いてあるの？」と書いた友達に聞いたり、「へたくそだから読めない」など、文字のきれいさ、読みにくさにも気づき、文字の書きの精緻化への意識の芽生えも見られた。(b)設定場面は、絵本の読み聞かせが中心であったが、ホワイトボードを使って、クラスの話し合いの過程で出された意見を書き留めるなど、保育者が文字を「書く」姿も目にする機会が増えた。子ども自身の読み書きを保育者が強要することはなかったが、製作物に「自分で書ける人は、(名前を)書いてもいいよ」というように、「書ける人は書く」といった対応がとられ、実際多くの子どもが名前を自分で書いていた。
④考察：子どもと文字とのかかわりの発達的変化は、以下のようにまとめられた。３歳児では「自分の名前」や「ものの名称」を表す文字を見たり、絵本を読むなど、まず「所有」や「名前」、「物語」などを「知る」ものとして文字と「出会う」。４歳児になると名前や手紙など、自分で文字を書くことも増え、仲のよい友達や保育者に思いを「表現」したり、「伝達」する手段として文字を「使う」ようになる。遊びや生活の中で、楽しさや書いたり読んだりする喜びを感じながら、必要感や必然性のある場面で文字が使用されるようになる。５歳児になると、文字が生活や遊びの一部となり、使用する対象の範囲も広がる。特定の親しい人だけではなく、園内の年少児など、幅広い対象と「情報」を「共有」したり、「伝達」するものとして文字を使うようになる。また文字のきれいさへの着目など、文字の「精緻化」にも目が向くようにもなる。
　保育者の援助については、３歳児は文字の存在・役割に「気づく」ことが主なねらいとされ、４歳児では文字の役割を知り、遊びや生活の中で「使おうとする」ことが大切にされた。５歳児になると文字が遊びや生活の中に根付き、文字を「使う」ための環境構成や援助が行われていた。

(3) 小学校１年生における子どもと文字のかかわり
：Ａ市立小学校１年生１クラス(27 名)における観察研究
①目的：スタートカリキュラムを検討するため、ベテラン教師の実践観察や事例の分析から、小学校入門期にふさわしい子どもと文字とのかかわりや教師の援助について明らかにする。
②分析方法：(a)文字環境、(b)「(話し)言葉による伝え合い」(授業時間外)の活動と教師の援助、(c)文字とかかわる活動(授業外活動と主に国語の授業)と教師の指導・援助について事例を収集し分析した。観察後の教師との振り返りやインタビュー、提供事例も分析に加えた。
③結果：(a)文字環境：ロッカーや机に貼られた「名前」など、大半が「文字のみ」の表記だった。ただし、給食当番、掃除当番、時間割などには「イラスト」が表示されていた。
(b)「言葉による伝え合い」：朝の健康観察や終わりの会などで、友達に伝えたいことを一言発表する機会が設けられていた。教師の援助は、「質問」し内容をより理解できるように補足したり、「･･だったんだって」と子どもの言葉を受け止め、繰り返して全体に伝える「リヴォイシング」が多く見られた。また司会者に進行を促すなど、会の方向づけも担っていた。
(c)文字とかかわる活動：授業は「文字(ひらがな)」を学びながら、文字を用いた学びが進められた。教師へのインタビューから、ひらがなの書字学習では、子どもの多くはひらがなを書くことができるが、「きれいに書くコツ」を見つけるという学習課題を「上乗せ」し、学級の学びとして共有することを目指しているとのことだった。また入学直後、６年生から行事に向けて書かれた手紙をもらい、自分たちもきれいな字を書きたいという意欲づけがされていた。書字学習は、範書や空書で文字の形を捉えた後、「気がついたことある？」と子どもたちに問い、子どもの発表→全体交流でコツを確かめて練習→言葉集めを基本の流れとして進めていくとのことだった。
　次の事例は「こ」の学習の際の子どもの気づきである。「こ」をきれいに書くコツについて、1 人の子どもが滑り台の経験をもとに、動き(身体表現)を伴いながら、オノマトペを用いて言葉で表現している。この言葉を捉え、教師は「小さい滑り台からピタッ」というクラスの「決まり言葉」を作りクラスで共有しながら、「画数」や「とめ」など学習用語を提示している。

事例　ひらがなの「こ」の学習～きれいに書くコツを見つけよう

子ども：２回目に書くとこな、はじめは上に曲がってるけど書き終わりは曲がれへんねん。 教　師：２回目に書くとこは、２画目ってこれから呼ぶよ。（画数：学習用語の提示） 子ども：わかった！　２画目は小さい滑り台からシューって滑ってきてピタッと止まって書くねん。 （動きをつけながら） 教　師：なるほど。「小さい滑り台からピタッ」って言いながらみんなで２画目を書くよ。 「ピタッ」は「とめ」って言うんだよ。（学習用語の提示）

　他の授業でも、子どもの体験を引き出し授業内容と関連づけたり、動作化やグループでの話し合い、クラスの友達に言葉で伝え共有しながら、学習課題を「上乗せ」した授業が展開された。
④考察：文字環境や活動、教師の援助には、幼児教育との重なりや連続性が多く見られた。子どもの経験や幼児教育で培ってきた力を引き出しながら、６年生へのあこがれやクラスの友達の

理解など、人とのつながりを生む授業が展開されていた。また、子ども自身や生活経験に結びつけたり、思いや考えを出し合い伝え合う(話し言葉)活動や、身体(動作化)を用いた表現の機会が授業に組み込まれていた。言葉は「伝えたい人」がいて「伝えたいこと」があってはじめて生まれる。「伝えたい人」の関係を築きながら、「伝えたいこと」を生む活動や授業が展開されていた。その上で、小学校の学習として新たな学びや気づきを「上乗せ」し、学びの「価値づけ」や「関連づけ」が行われていた。

(4) 幼児教育における「言葉による伝え合い」の活動と保育者の援助
：N市立こども園における４歳児(29 名)，５歳児(28 名)クラスの観察
①目的：文字とのかかわりを支える「(話し)言葉による伝え合い」の活動内容と保育者の援助を４，５歳児の観察から明らかにする。５歳児ではクラス集団で行う「言葉による伝え合い」活動の全体像を捉え、４歳児では最も頻繁に行われる「好きな遊びのふりかえり」を取り上げた。
②分析方法：(a)クラス集団で行う「言葉による伝え合い」：５歳児の観察から事例を収集し、「形態(子どもの人数)」「機能(目的)」「保育者の援助」の３点を分析した。(b)好きな遊びのふりかえり：４歳児の観察から事例を収集し、「活動の内容」「保育者の援助」について分析した。
③結果：(a)「言葉による伝え合い」：「形態」は個人・ペア・グループ・クラスに分けられ、機能は「決める」「伝える」の２つに分類された。年間を通して「クラス」全体に「伝える」活動が最も多く、「ペア」や「グループ」で「決めた」内容が「クラス」全体に「伝え」られていた。保育者の援助の特徴は「リヴォイシング」によるイメージの明確化、自我関与を生むオープンエンドの「問いかけ」、イメージを明確化と共有を助ける「具体物の提示」の３点にまとめられた。(b)好きな遊びのふりかえり：「ふりかえりの内容」には、子どもの遊びの報告の他、保育者からの遊びの報告、遊びに関わるルールや約束が見られた。保育者の援助の特徴は「伝え合いのルールの明確化(活動の開始と終了の宣言・聞く態度・話し方)」、「報告者以外の子どもへの参加促進(報告者の決定・遊びの感想・保育者の提案・相談に対する意見)」、「報告内容の明確化(具体物の提示、実演・リヴォイシング・補足説明・問いかけ)」の３点が見られた。
④考察：４歳児の「好きな遊びのふりかえり」は、活動の進め方が示され、活動が形作られる時期にあった。保育者が自ら報告者となりモデルを示しながら、問いかけ、補うことで、子どもの言葉を引き出し、ルールを伝えていた。また、実物提示や実演、リヴォイジングを用いながら、報告者以外の参加も引き出し、イメージを共有・明確化しながら場面を構成していた。５歳児の「言葉による伝え合い」はペア、グループの伝え合いをクラスの伝え合いにつなぐなど複層的に構成され、具体物の提示で興味や予測を喚起する工夫がされていた。またリヴォイシングや問いかけなどにより、友達のことを「我がこと」として考え、話し、理解する場として設定されていた。クラスのつながりや一体感を育むことが活動のねらいとして重視されていた。

(5)「文字とのかかわり」に着目した接続期カリキュラムの作成

表１　文字とのかかわり」に着目した接続期カリキュラム

	３歳児	４歳児	５歳児	小学１年生
友達とのかかわり	友達とのかかわりを楽しむ	友達といっしょに遊ぶ楽しさを味わう	友達みんなでやり遂げる充実感を味わう	友達とのかかわりの中で学ぶ楽しさを味わう
文字とのかかわり	文字と出会う	文字を使おうとする	文字を使う	文字を学ぶ 文字で学ぶ
環境構成のねらい	生活や遊びを知る文字環境(必要なものの名称) 文字の存在に気づき、そのはたらきを知る	遊びを広げる文字環境（読む情報・書く道具） 文字などを使う楽しさや便利さに気づく	遊びや生活を創る文字環境 文字のはたらきを知って使うようになる	学習手段としての文字環境 読み書きの精緻化に関心をもつ
表示内容	名前（わたし） 名称(もの・場所) 思い・ねがい 物語	情報	思考ツール	
表示の種類	絵・記号(マーク)・写真との併記		文字のみ	

研究の過程において、文字の習得には人とのかかわりが重要であることが再確認された。そこで文字の機能に立ち返り、文字習得を支える子どもの協同性の育ち(友達とのかかわり)を基盤としたカリキュラムを表１の通り作成した。本カリキュラムの活用により、幼児期の教育と小学校教育の子どもの学びをつなぎながら、人とのかかわりを深める文字教育の展開が期待される。

<引用文献>
①OECD (2012)“Starting Strong III: A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care”
②岡本夏木（1985）『ことばと発達』 岩波新書
③巣立早希・和田圭壮 （2008） 幼稚園における文字指導に関する一考察～園における実態調査に基づいて～、福岡教育大学紀要、63、83-93.
④三神廣子（2003）『本が好きな子に育つために－文字の習得と読書への準備』 萌文書林
⑤内田伸子（1999）『発達心理学－ことばの獲得と教育』岩波書店

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 横山真貴子・鎌田大雅
２．発表標題 保育における４歳児の「言葉による伝え合い」の育ち（１）：１学期の好きな遊びの振り返り場面の分析
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 横山真貴子
２．発表標題 ５歳児の協同性の育ちと保育者の援助（１）：協同性の育ちを支えるクラスのつながりの形成過程
３．学会等名 日本保育学会第70回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 本山方子・水﨑誠・中村恵・横山真貴子・無藤隆
２．発表標題 「学びを織りなす」幼児教育のデザイン：子どもは自らの生きる世界といかに対話するか
３．学会等名 日本保育学会第70回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 横山真貴子
２．発表標題 ５歳児の協同性の育ちと保育者の援助（２）：協同性の育ちを支える「言葉による伝え合い」場面の分析
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 松嵜洋子・吉永早苗・入澤里子・嶋田弘之・木村治生・横山真貴子
２．発表標題 幼児期の学びを生かした小学校教育への接続：表現と言葉の育ちの観点から
３．学会等名 日本保育学会第69回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Makiko Yokoyama
２．発表標題 The Roles of Kindergarten Teacher in 5-year-old Children’s Discussions.
３．学会等名 The 20th Pacific Early Childhood Education Research Association Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 横山真貴子
２．発表標題 保育における４歳児の「言葉による伝え合い」の育ち（２）：４歳児の好きな遊びの振り返り場面の分析
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第29回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計8件

１．著者名 日本読書学会編（藤森裕治・秋田喜代美・横山真貴子ほか31名）	４．発行年 2019年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 384
３．書名 読書教育の未来	

１．著者名 藤崎亜由子・羽野ゆつ子・渋谷郁子・網谷綾香（編）・横山真貴子（ほか15名）	４．発行年 2019年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 256
３．書名 あなたと生きる発達心理学	

１．著者名 外山紀子・安藤智子・本山方子（編）・横山真貴子（ほか11名）	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 264
３．書名 生活のなかの発達	

１．著者名 公益財団法人児童育成協会（監修）、杉村 伸一郎・山名裕子（編）・横山真貴子（ほか13名）	４．発行年 2019年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 183
３．書名 保育の心理学	

１．著者名 無藤隆（監修）・宮里暁美（編集代表）・横山真貴子（ほか８名）	４．発行年 2018年
２．出版社 萌文書林	５．総ページ数 222
３．書名 新訂・事例で学ぶ保育内容　領域言葉	

1．著者名 中坪史典（編著）・横山真貴子（ほか40名）	4．発行年 2018年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 352
3．書名 テーマでみる保育実践の中にある保育者の専門性へのアプローチ	

1．著者名 無藤隆（編著）・横山真貴子（ほか29名）	4．発行年 2018年
2．出版社 ひかりのくに	5．総ページ数 128
3．書名 10の姿プラス5・実践解説書	

1．著者名 津金美智子（編著）・横山真貴子（ほか20名）	4．発行年 2017年
2．出版社 東洋館出版社	5．総ページ数 174
3．書名 ［平成29年版］新幼稚園教育要領ポイント総整理　幼稚園	

〔産業財産権〕

〔その他〕

①横山真貴子　2019　幼児期の学びとつなぐ国語科入門期の学び、ことのは、4、pp.4-5、東京書籍
②横山真貴子　2019子どもの萌芽的読み書き能力：芽生えの中にある育つ力を引き出し、支える、私幼時報、411、p.1、全日本私立幼稚園連合会・公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
③横山真貴子　2018　子どもたちが自ら未来を創る「言葉による伝え合い」、幼児教育じほう、46(6),pp 5-11、全国国公立幼稚園・こども園長会
④横山真貴子　2018　幼児期の学びを生かした国語教育を、ことのは、3、p.2、東京書籍
⑤横山真貴子　2016　幼児期に育む言葉による伝え合いの基礎、初等教育資料、943，pp.88-91

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	八瀬　宗子 (Yase Syuko)		
研究協力者	鎌田　大雅 (Kamada Taiga)		